

Linda Rae Bennett,

*Women, Islam and Modernity:  
Single Women, Sexuality  
and Reproductive Health in  
Contemporary Indonesia.*

London and New York: Routledge Curzon,  
2005. xx + 183pp.

おお がた さと み  
大形里美

本書は、現代インドネシアのイスラム社会における未婚のムスリム女性たちのセクシュアリティとリプロダクティブ・ヘルスの実態に関する研究である。オーストラリア人の著者はリプロダクティブ・ヘルス分野の専門知識をもつ医療人類学者として、医療現場の観察や未婚のムスリム女性たちとの個人的な付き合いなどを通じて得られた情報に基づき、未婚のムスリム女性たちのセクシュアリティについて議論を展開している。

著者は、近代化によって伝統社会が急速に変容しつつある地方都市のひとつとして、西ヌサ・トゥンガラ州の州都マタラム市を調査地とした。マタラム市が位置するロンボック島は、240万人の島民の95.6パーセントがムスリムであり、同市は35万人の住民の81.3パーセントがムスリムである。また島民の95パーセントを占めるササク族はイスラムに対する信仰が深いことでよく知られている (p.13)。

本書の構成は以下のとおりである。

序 章

第1章 セクシュアリティとジェンダーに関す

る文化的構造

第2章 娘の身体 女性らしさと欲望についての銘記

第3章 婚前関係と現代の求愛実践

第4章 土着の性に関する筋書きと社会変容

第5章 女性の健康と娘のアイデンティティー

第6章 未婚女性のリプロダクティブ・ライツ  
(性と生殖に関する諸権利)

結 論

以下、序章を除く各章の内容を概説する。

第1章ではまず、インドネシア政府の主導する家族計画が、母性を重視する同国の国家イデオロギーを反映し、未婚女性をサービス対象から排除しているため、身体の自律性に関する女性の権利を尊重しないものであることが指摘される。次にアダットとイスラムの両方において、未婚女性の処女性が重視され、女性が性的に積極的であることや、未婚女性が性的関係をもつことにさまざまな社会的制裁が加えられる状況がある一方、男性には同様の状況がない、という性に関する二重基準の存在が指摘される。また、婚姻関係に縛られない自由なセックスが性的不道徳として捉えられているために、マタラム市において、セクシュアリティが公共の場に見えない状況が作り出されているとする。

第2章では、娘としてのアイデンティティー形成における宗教の重要性が確認されると同時に、未婚のムスリム女性たちのセクシュアリティが文化的宗教的規制によってのみ形成されているものではないことが指摘される。マタラム市の未婚女性たちは、慎重深さを重視する文化的規範があるため、身体的美しさを強調しすぎたり、男性への話し方や振る舞いが親しすぎたりしてはならず、性的規範を逸脱しないよう注意深くなければならない (pp.49-50)。そして娘時代には、握手やキスもしない完全に禁欲的な交際形態が理想的とされる。しかし、実際には多くの未婚女性が自らの性的欲求を表現する機会を追求していることや、異性との交際においては、女性たちが男性との身体的関係に制限を設けることを自分たちの役割であると捉えており、結婚まで処女で

いたいと望む女性たちは、男性との身体的関係を上半身だけに制限している実態などが報告される (p.61)。

第3章では、若い女性たちが就学や就職のために両親と別居する機会が増え、結婚前の男女交際の形態が変化してきている実態が報告される。現代のマタラム市における男女交際の形態は、女性の家で両親の監督下のみ交際相手との面会が許される「ミダン」(midang)と呼ばれるササク族のアダットに基づいた伝統的交際の形態に限られることなく、女性の家以外の公的な場における「近代的なデート」(pacaran moderen : パチャラン・モデルン)の機会が増加していることが指摘される。また、人目を避ける「裏通りのデート」(pacaran backstreet : パチャラン・バックストリート)と呼ばれる形態もあり、この裏通りのデートが、性的逸脱行為を不可視のものとすることで社会的調和を保つ重要な役割を果たしているとする (p.79)。裏通りのデートについて、若い女性たちが文化的理想像に公的には追従しながらも、私的には積極的に反逆し、文化的規範形成の主体となっていることを示すものだと著者は捉える (p.80)。

続く第4章では、アダットを代表する事例として「ペレット」(pelet)と呼ばれる「恋の魔術」と、「駆け落ち婚」の慣習<sup>(注1)</sup>が取り上げられ、結婚前のセクシュアリティ形成におけるアダットの役割が論じられる。性的逸脱行為を犯した女性が、恋の魔術にかかったとされることでその責任から逃れられることから、恋の魔術が女性の性欲を隠す社会的メカニズムとして機能していると同時に、批判を受けるリスクを高めることなく女性が抵抗できる空間を提供していると著者はみる。また、駆け落ち婚に関しては、女性の合意に基づいて行われること、家族の反対がある場合に駆け落ちをすれば家族の合意を得られやすいこと、そして結婚前に妊娠してしまった場合には早急に結婚式を挙げ、女性に対する社会的制裁を回避できることなどを理由に、駆け落ち婚という慣習が、男性に連れ去られる女性というイメージとは逆に、女性の自律性を助け、性に関する支配的な規範に対して反逆する作用をもつものであ

ると著者は捉える。

第5章では、墮胎手術を受け、後遺症を負った未婚女性と、性的な経験をもたない女性の2つの事例を考察し、処女性や性的経験とは無関係に未婚女性がリプロダクティブ・ヘルスに関する医療サービスを受けることには、障壁が存在していることを指摘する。その障壁とは、未婚女性が診療を受ける際にさまざまな精神的苦痛を感じるだけでなく、診断を受けること自体が社会的不名誉をもたらすために、医療サービスにアクセスすることを躊躇してしまうというものである。そしてそのことは、経済的自立性をもたない未婚女性たちが、同国政府の家族計画プログラムのサービス対象から除外されているために適切な医療サービスにアクセスできない状況にあること、そしてリプロダクティブ・ヘルスが一般にセックスと妊娠に密接に関連づけられているため、未婚女性はリプロダクティブ・ヘルスに関する医療サービスを受けるべき立場にないという偏見を医療従事者がもっていることが原因となっているという。著者は、安全でない墮胎手術を原因とする高い妊婦死亡率を改善するためには、医療従事者たちの意識改革が重要であり、また未婚女性の墮胎を合法化するための法改革が急務だとする。

第6章では、HIVやその他の性感染症について、予防政策のあり方と治療を受ける権利について論じられる。著者は、学校におけるリプロダクションとセクシュアリティに関する教育の不備を指摘するとともに、増加するHIV感染率に関連して、売春婦や薬物使用者などの「リスク・グループ」だけに焦点をあてるインドネシア政府のHIV防止政策の脆弱さと危険性を指摘する。また、HIVやその他の性感染症の予防には教育とコンドームの奨励が鍵となるが、コンドームを売春や逸脱した性関係と結び付ける文化的バイアスが妨げとなっているため、これを改善することが必要だとする。

そして、リプロダクティブ・ヘルスに関する若いムスリム女性たちの経験において宗教と精神性が中心的な役割を果たしているとする著者は、イスラムが女性たちのリプロダクティブ・ライツを向上させるための倫理的枠組みを提供する潜在能力をもって

いることに注目する。著者は、女性のリプロダクティブ・ヘルス問題に取り組む革新的なイスラム系 NGO（非政府組織）によって頻繁に使用されているというイスラムの 8 つの原則を紹介する。それらはクルアーンが教える道徳的普遍性とイスラムにおける神の慈愛の重要性をイデオロギー的支柱とするもので、具体的には、男女が平等に創造され同じ権利をもつこと、イスラムにおいて性的なエネルギーが否定的なものとはみられていないこと、性的関係が生殖目的のためだけに限定されないこと、妻が夫の性的要求を拒否する権利をもつこと、女性が妊娠と墮胎に関して自己決定権をもつこと、などである。著者は、これらイスラムの倫理的枠組みがムスリム女性たちの性と生殖に関する権利意識を強化するために使用可能で、文化的にも適切なものだとする。

結論においては、1998年の経済危機以降のリプロダクティブ・ヘルスに関する状況変化について触れ、エイズ予防の緊急性や、未婚女性のリプロダクティブ・ヘルス向上のためには政府の家族計画サービスの対象に未婚女性を含めるなどのラディカルな措置が必要であると強く提言する。そして本書に描かれたインドネシアの若い娘たちの実態は、家族の外における未婚女性の合法的な役割とアイデンティティーを否定しようとするイスラムの狭い解釈を否定するものであり、現代において未婚のムスリム女性たちは、社会変化の主体として有能で熱意をもった市民として認知されるべきだと著者は主張する。

現代のイスラム諸国において、ジェンダーやセクシュアリティに関する事柄は、それがイスラム共同体としてのアイデンティティーや価値観の根幹に関わる領域をなしているという意味でセンシティブな問題であり、インドネシアにおいてもジェンダー平等を目指す革新勢力と、それに対抗するイスラム保守派勢力が対峙する場として、近年政治的にも重要な意味をもち始めている。しかしながら、未婚のムスリム女性のセクシュアリティやリプロダクテ

ィブ・ヘルスの実態に関する本格的な研究は、これまで皆無であった。その意味で本書はパイオニア的研究として大いに注目に値する。

著者が調査対象とした未婚のムスリム女性たちは、性的に積極的である傾向をもつ社会グループであったと考えられ<sup>(注2)</sup>、本書は、現代インドネシアにおける未婚のムスリム女性のセクシュアリティとリプロダクティブ・ヘルスについての一般の状況を明らかにするものではないが、近代化の途上にあるムスリム社会において性的に積極的な未婚女性たちが現在置かれているリプロダクティブ・ヘルスに関する危機的状況について警鐘をならす貴重な研究である。

以下、評者が気づいた事柄を 3 点挙げておきたい。1 点めは、インドネシアのイスラム社会が高度にシンクレティックであるとする著者の見方と、それを前提として論じられるイスラムとアダットの関係についてである。インドネシアのイスラム社会が高度にシンクレティックであるとする著者の見方は、Geertz (1960) に基づくものであるが、ギアーツの見解に対しては、その後 Woodward (1989) らによって異議が唱えられている。調査地マタラムがジャワに比べイスラム色が強い地域であることも考慮すれば、この見方には議論の余地がある。著者は「魔術」を意味する “seher” が、ササク語であるとするが (p.85)、これは明らかにアラビア語の “sihir” からの借用語であり、「魔術」に対する信仰やそれを使用することは、他のイスラム社会にもみられる普遍的な現象として捉えられることも可能である。また著者は、駆け落ち婚について、男性が女性を夜に男性の生家に連れ去るため、性的逸脱行為が行われる可能性が否定できず、イスラムとアダットの衝突を示す事例として位置づける (p.99)。しかし本来のアダットでは、女性を連れ去るのは男性本人ではなく、男性の男の親族と付き添いの女性 1 人とされ、連れ去られた後、女性は男性の生家ではなく、親族の家もしくは地域の首長などの家にかくまわれるという [Kompas 2005]。したがって、伝統的なアダットにおいては結婚前の男女に性的逸脱行為が起こらないための配慮が十分になされていると考え

るのが自然であり、著者が紹介する現代の駆け落ち婚の形態は、近代化によって変容したものと捉えられるべきであろう。アダットをより長い歴史的スパンで捉えるならば、駆け落ち婚をアダットとイスラムが衝突し、緊張する場とみなすことは拙速であると評者は考える。

2点めは、イスラムに関する情報の正確さについてである。著者は女性のリプロダクティブ・ヘルスの向上に役立つと思われるイスラムの原則のひとつとして「女性が妊娠と墮胎に関して自己決定する権利をもつ」という原則を挙げているが、著者も本書で参照しているマスウディ(Mas Udi)の著書では、子供を作るかどうかを決定する権利については、四大法学派のなかでもっともリベラルなハナフィー派においてさえ、妻の権利が強調されるものの、あくまでも夫と妻の両方の権利であるされており[ Mas Udi 1997, 124 ], 著者の記述内容については確認が必要だと思われる。また著者は、駆け落ち婚をする際に女性の両親の同意が得られなかった場合には、アダットからイスラムに切り替えて結婚式を挙げ宗務局に届け出ができるとする(p.98)が、同国では「1974年婚姻法」第2条において、婚姻は宗教法に基づくことが定められており、ムスリム女性が結婚する場合には、後見人としての男性親族の同意が必須である(「イスラム法手引書」第19~23条)。女性側の家族の同意が得られない場合、著者が記述するほどに婚姻は容易ではない筈である。その他、「生理」を意味する“haid”がアラビア語からの借用語であるにもかかわらず、ササック語であるとする(p.43)など、不正確な情報がいくつか見受けられる点も気になった。

最後に、イスラム社会におけるセクシュアリティのあり方について批判や政策提言を行う際には、十分な配慮と慎重さが欠かせないことを確認しておきたい。著者が行っているような現状告発や政策提言は、著者が現地社会には属さない他者であったからこそ可能であった側面も強く、声なき未婚女性たちの声を代弁することの必要性を認めるならば、他者による批判や干渉も否定されるべきではないだろう。しかしながら、同国のイスラム保守派の間には、

西洋諸国がイスラムの伝統的価値観を浸食することで、イスラム共同体を弱体化させ政治経済的に支配しようという陰謀をもっているとする見方が根強くある。「結婚前のセックスに関する偏見に異議を唱えることが必要である」(p.125)として性的に積極的な未婚女性を社会変革の主体として積極的に評価する西洋人である著者による干渉は、イスラム社会において不信感や猜疑心をもって受け止められかねない。著者が本書で紹介しているような女性の権利を擁護するために活動しているイスラム系 NGO の活動家たちは結婚前のセックスを支持している訳ではないが、西洋諸国からの資金援助に依存して活動していることが、上記のような文脈から保守派勢力による批判に曝されている。本書が扱う内容は、まさにイスラムの伝統的価値観やアイデンティティーに関わるものである。研究対象となる社会とは大きく異なる価値観をもつ研究者によって書かれた本書が、現代インドネシアのイスラム社会へ与える影響について配慮を欠いていると感じるのは、果たして評者だけであろうか。

(注1) 評者が確認しえた限りでは、「恋の魔術」も「駆け落ち婚」も、都市部においてはもはやめつたにみられない慣行であり、一部の農村地域に残る慣習のようである。

(注2) 著者は恣意的に研究対象を選択したわけではないが、まわりに集まってくる女性たちのなかに、著者のリプロダクティブ・ヘルスについての専門的知識を頼って、アドバイスを求めてくる女性たちが多かったことは著者が認めているところである(p.xviii)。

## 文献リスト

< 英語文献 >

- Geertz, Clifford 1960. *The Religion of Java*. Glencoe, Ill.: Free Press.
- Woodward, Mark R. 1989. *Islam in Java: Normative Piety and Mysticism in the Sultanate of Yogyakarta*. Tucson: The University of Arizona Press.

<インドネシア語文献>

Mas'udi, Masdar 1997. *Islam dan Hak-Hak Reproduksi Perempuan* [ イスラムと女性の性と生殖の諸権利 ]. Bandung: Mizan.

<インターネット>

Kompas 2005. "Merarik yang nyaris kehilangan makna [ ほとんど意味を失いかけた駆け落ち婚 ]", 15 December ( <http://www.kompas.com> ).

(九州国際大学国際関係学部助教授)